

『ハヴロック』における語順について

濱崎 孔一廊

(1994年10月17日 受理)

On the Word Order in *Havelok*

HAMASAKI Koitiro

0. はじめに

韻文の語順については、韻律・脚韻の影響を強く受けるために、従来は調査が困難とされてきた。しかし、最近の言語理論の発達によって深層構造という抽象的なレベルでの語順の研究が進んだことから、表層に現れた語順も、文体的な規則を取り去った深層構造での語順を特定できれば、その統語構造の解明が可能ではある。

そこで本稿では、ME 期の作品『ハヴロック』を取り上げ、その語順を解明することによって、この作品における統語構造を明らかにしていくことを目的とする。本論の主張をまとめると、次のようになる。

- (1) 『ハヴロック』における英語では、韻律・脚韻の要請によって一見ばらばらな語順を示しているかのように見えるが、文体上の操作を取り払うと、主節も従属節も一定の定まった基底語順 SVO を持っている。
- (2) 『ハヴロック』に見られる多様な語順は、いくつかの文体上の操作の他に、代名詞類が接語 (clitic) として機能しているためである。

1. データ

例文の収集に際しては、最も新しく信頼性の高い Smithers 編集によるテキストを採用した。もちろん、他のテキストや写本も参照したが、解釈が一定していない例や曖昧な例は除き、明確な例文だけを分析の対象とした。^{1, 2}

それぞれの場合における語順の型とその生起する度数およびパーセンテージを示し、おのおのの具体例をひとつずつ示す。

1.1.1.1.定形動詞のみを含む主節(ただし,主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvO	21	70%
II. SOv	4	13%
III. OSv	1	3%
IV. OvS	4	13%
計	30	

- I. SvO Haelok shof dun nyne or ten (872)
 “Havelok pushed down nine or ten”
- II. SOv And for þat Grim þat place aute (744)
 “And for that Grim owned that place”
- III. OSv Jn þat time al Hengelond /þerl Godrich hauede in his hond (1000-01)
 “At that time Godrich had all England in his hand”
- IV. OvS An mikel sorwe haueden alle — (238)
 “And all had much sorrow”

1.1.1.2.定形動詞の他に非定形動詞を含む主節(ただし,主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvVO	5	42%
II. SvOV	1	8%
III. vSVO	4	33%
IV. vSOV	1	8%
V. SOvV	1	8%
計	12	

- I. SvVO Jlk of you shal haue castles ten (1443)
 “Each of you shall have ten castles”
- II. SvOV man shal god wille haue (601)
 “man ought to have goodwill”
- III. vSVO þer mouthe men se /þe moste ioie... (2321-22)
 “there the men could see the greatest joy”
- IV. vSOV For hire shal men hire louerd slo (1746)
 “For her men must kill her husband”
- V. SOvV non þe dom ne durste lette (2820)
 “no one dared obstruct the judgment”

1.1.2.1.定形動詞のみを含む主節(ただし,主語・目的語のいずれか,もしくは両方が代名詞類)

I. SvO	97	54%
II. SOv	19	11%

III. OSv	25	14%	
IV. OvS	14	8%	
V. vSO	23	13%	
計	178		
I. SvO	Jch haue in honde a ful god ore —		(1887)
	“I have a very good oar in my hand”		
II. SOv	Neueremore he him misseyde		(994)
	“He never affronted him”		
III. OSv	Mani god fish þer-inne he tok		(752)
	“He caught a lot of good fish in it”		
IV. OvS	þat forwarde makeden he —		(555)
	“they made that compact”		
V. vSO	Of knith ne hauede he neuere drede		(90)
	“He never had fear for knights”		

1.1.2.2. 定形動詞の他に非定形動詞を含む主節（ただし、主語・目的語のいずれか、もしくは両方が代名詞類）

I. SvVO	25	28%	
II. SvOV	19	21%	
III. vSVO	12	13%	
IV. vSOV	16	18%	
V. OvSV	9	10%	
VI. OvVS	1	1%	
VII. OSvV	4	4%	
VIII. VOSv	1	1%	
IX. vOSV	1	1%	
X. VSvO	1	1%	
計	89		
I. SvVO	J shal flemen þe of londe		(1161)
	“I will banish you from this country”		
II. SvOV	Gladlike I wile þe paniers bere —		(806)
	“I will carry the baskets with pleasure”		
III. vSVO	Haue Ich gadred you for no gamen		(2578)
	“I have mustered you for no frivolity”		
IV. vSOV	So wolde he his mester lere		(824)

- “So he wished to learn his occupation”
- V. OvSV þe herles mete hauede he bouth /Of Cornwalie (884-85)
 “He had bought the food for the earl of Cornwall”
- VI. OvVS þe shal spusen mi cokes knaue – (1124)
 “My cook’s servant shall wed you”
- VII. OSvV His sorwe he couþe ful wel miþe (949)
 “He could conceal his sorrow very fully”
- VIII. VOSv drepen him he wolden yerne (1866)
 they wanted to slay him eagerly
- IX. vOSV To wronge nicht him noman bringe (72)
 “No man could bring him to evil deeds”
- X. VSvO don Ich haue /þat þou me bede of þe knaue (668-69)
 “I have done what you commanded to me regarding the boy”

1.2.1.1. 定形動詞のみを含む従属節 (ただし, 主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvO	10	91%
II. SOv	1	9%
計	11	

- I. SvO Hwan Ubbe hauede þe gold ring (1643)
 “When Ubbe had the gold ring”
- II. SOv þat men fro him his birþene nam (901)
 “that the men received his load from him”

1.2.1.2. 定形動詞の他に非定形動詞を含む従属節 (ただし, 主語・目的語いずれも代名詞類ではない)

I. SvVO	2	40%
II. SvOV	1	20%
III. vSVO	2	40%
計	5	

- I. SvVO als men mithe telle a pund (2616)
 “while the men could count out a pound”
- II. SvOV þat God self shulde his soule leden /Jnto heuene (245-46)
 “that God himself should lead his soul to heaven”
- III. vSVO þere michte men se /þe meste sorwe (232-33)
 “where men could see the greatest sorrow”

1.2.2.1. 定形動詞のみを含む従属節 (ただし, 主語・目的語のいずれか, もしくは両方が代名詞類)

I. SvO	36	51%
--------	----	-----

II. SOv	29	41%
III. OvS	1	1%
IV. vSO	4	6%
計	70	

I. SvO	Or he dide ani oþer dede	(1357)
	“Before he did any other deed”	
II. SOv	But þu þis man understonde	(1160)
	“Unless you accept this man”	
III. OvS	þat him ne hauede grip or ern	(573)
	“that a vulture or an eagle did not catch him”	
IV. vSO	þat euere et Ich bred of koren	(1880)
	“that I ever ate bread of corn”	

1.2.2.2.定形動詞のほかに非定形動詞を含む従属節（ただし、主語・目的語のいずれか、もしくは両方が代名詞類）

I. SvVO	18	26%
II. SvOV	35	52%
III. SOvV	8	12%
IV. SVvO	1	1%
V. vSVO	2	3%
VI. OvSV	2	3%
VII. vOVS	1	1%
計	67	

I. SvVO	þat Y mithe seken mi ware	(1630)
	“that I could seek my merchandise”	
II. SvOV	Hwan he haueden alle þe king gret	(2291)
	“When they have all saluted the king”	
III. SOvV	Hwan þe swike him hauede heþede	(552)
	“When the traitor had strictly enjoined him”	
IV. SVvO	And til þat she louen muthe /Wom-so...	(196-97)
	“And till she might love whomever...”	
V. vSVO	So mote Ich brouke mi rith eie	(2546)
	“As I could enjoy the use of my right eye”	
VI. OvSV	þat hire sholde noman wedde	(1114)
	“that no man could wed her”	

VII. vOVS so þat wit no salue /Ne sholde him helen leche non (1836-37)

“so that with any healing ointment no physician could restore him to health”

以上のことから次のことが言える。第1に、主節・従属節いずれの場合も SVO の語順の頻度が極めて高い。第2に、その一方で、『ハヴロック』の英語は非常に多様な語順の型を示している。特に、定形動詞ばかりでなく非定形動詞が現れた場合の語順はいつそう複雑になる。これらのデータを基に、以下でこれがどのように統一的に説明できるか考察していく。

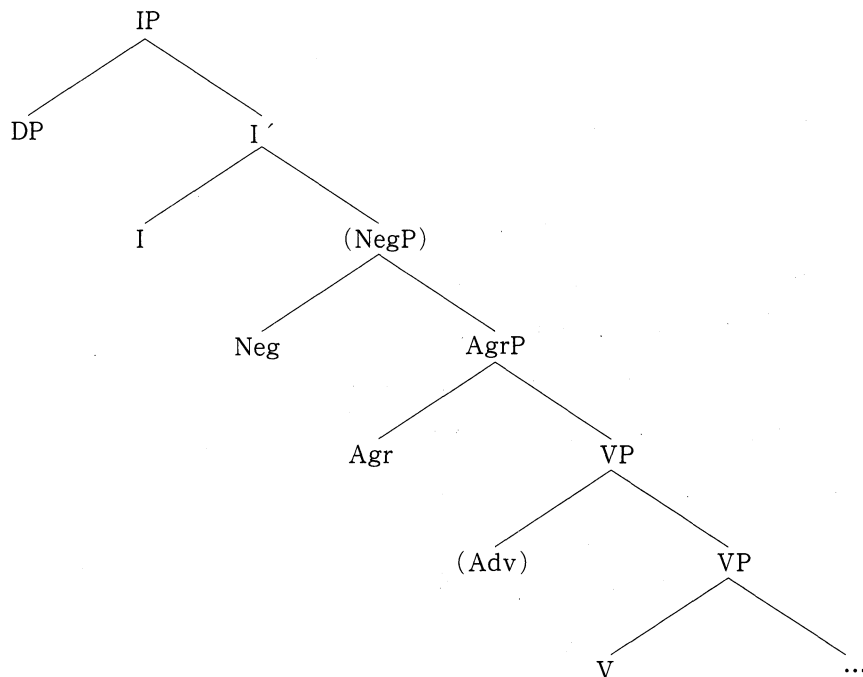
2. 英語史における語順の変化

第1節で提示してデータを分析していく前に、語順型を明らかにするために、ここで採用する文構造の理論的枠組みをまず示していく。

2. 1. 文の内部構造

Chomsky (1986) 以降、Xバー理論が N, V, A, P といった語彙範疇ばかりでなく、C, I などの機能範疇にまで拡大された。その後の機能範疇の研究の中でも、ここでの議論に最も関わりのある注目すべき研究は Pollock (1989) である。そこでは、否定辞・疑問文形成・副詞の位置・遊離数量詞等の統語法について英語とフランス語とを比較することによって、文 (IP) の内部構造が詳細に解明されている。Chomsky (1986) では IP 内部の機能範疇は I だけに限られていたが、I の中にも一致要素 (Agr) と時制要素 (Tense) とが存在することはすでに示唆されていた。³ そこで、ふたつの機能範疇の最大投射 AgrP と TP を IP 内部に設定し、さらに否定文の場合にはこれに NegP が生じるような構造を提案している。ここでは、『ハヴロック』における語順を検討するのに十分な(3)の文構造を仮定する。⁴

(3)



NegP は丸括弧に入れてあることから分るように、否定文の場合にのみ生じ、肯定文では省略される。語彙範疇 V はたとえ何の語形変化を示していない場合でも、表層に現れるまでに時制・一致要素と結び付かなくてはならない。そこで問題になってくるのは、V が I へ移動するのか、I が V へ移動するのかということである。時制・一致要素と V の基底の位置の間に何も介在する要素がない場合はどちらが移動しようと同じ結果しか得られないので判別できない。しかし、両者の間に否定辞や副詞類が生じてくる場合には明確な違いが観察される。次の例を考えてみよう。

(4) [IP DP I ([Neg not/pas]) [VP (Adv)V...]]

(5) a. *John likes not Mary.

b. Jean (n') aime pas Marie.

(6) a. *John kisses often Mary.

b. Jean embrasse souvent Marie.

c. John often kisses Mary.

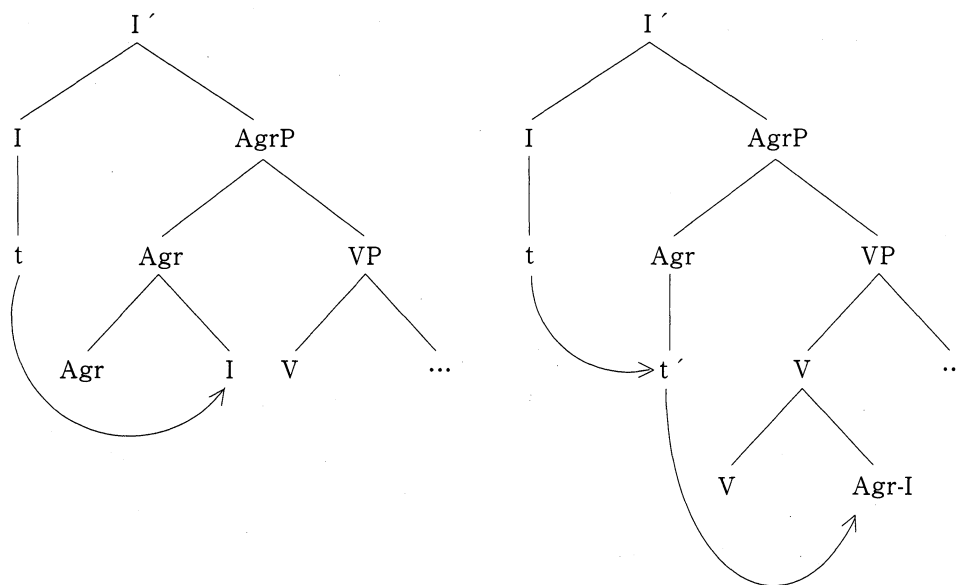
d. *Jean souvent embrasse Marie.

(Pollock (1989: 367))

まず、英語の場合、(5 a), (6 a) の例では、否定辞・副詞類の左側に動詞要素が現れているので V が I へ移動したものと考えられるが、非文になっている。それに対して、I の方が V に移動したと考えられる (6 c) の例は文法的である。従って、英語では、I が V に繰り下げられたものと考えられる。この変化を必要な部分だけ図に示すと次のようになる。

(7) a.

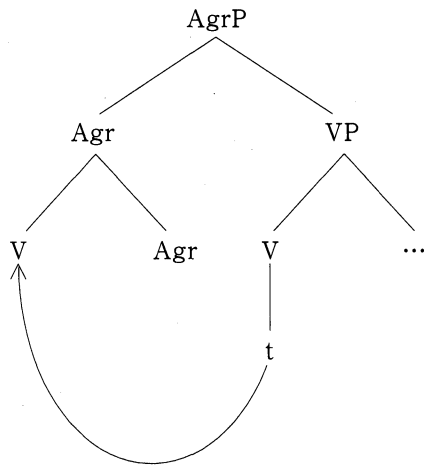
b.



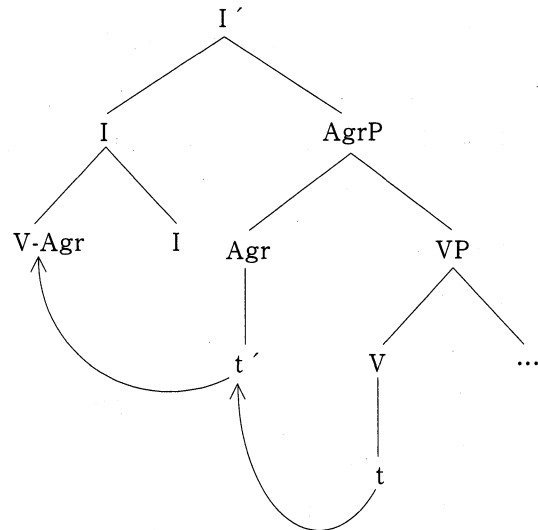
次に、フランス語の場合、英語とは逆の振る舞いを示している。すなわち、(6 d) に示すように、副詞類の右側に動詞要素が現れていて、I が V の方へ移動したと考えられる例は非文法的である。一方、(5 b), (6 b) のように、V が I の方へ繰り上がったと思われる例は文法的である。

この移動の過程を同じように図示してみる。

(8) a.



b.



2. 2. OE から ME にかけての基底語順の歴史的変化

『ハヴロック』の英語の基底語順を特定する前に、英語の基底語順の歴史的変化について考えておく。というのも OE から ME にかけて、屈折変化の水平化と共に語順の固定化（あるいは変化）があったとされるのであるが、言語変化は長い時間をかけて徐々に生じるものであり、『ハヴロック』の英語が純粋に ME の特徴を反映しているか検討が必要であると思われるからである。例えば、語彙の構成を福元（1992）から見てみると次のようになる。

(9) a. 英語本来語	1369語	83%
b. ロマンズ諸語	150語	9%
c. 北欧語	135語	8%

ME は、ゲルマン系の言語に、フランス語・ラテン語などのロマンス諸語の影響が及んで出来上がったものである。ところが『ハヴロック』の舞台がデンマークを中心とする北欧であることを反映してか、(9)の統計を見る限りロマンス諸語の影響はそれほど大きくないのではないかという予想が成り立つ。また、関係詞を見ても、OE から存在していた自由関係詞 (free relative) を除けば Wh 関係詞はひとつも観察されない。ゲルマン諸語の関係詞には指示詞 (demonstrative) が使われ、他方ロマンス諸語の関係詞は疑問詞が使われるのが一般的である。ところが、『ハヴロック』の英語では、先ほど触れた例外を除くと、OE の指示詞から発達した *þat* ばかりである。このことから、『ハヴロック』の英語は、まだロマンス諸語の影響の少ない、OE の基底語順をいくらかなりとも反映しているかもしれないという予想が成り立つ。そこで、以下で OE の基底語順と ME の基底語順の歴史的変化を辿っていく。

2. 2. 1. OE の基底語順

OE の語順については、主節の場合、定形動詞が第 2 番目の位置を占め、従属節では定形動詞が節の最後で、非定形動詞はその前というのが一般的である。

- (10) a. Se swicola Herodes cwæð to ðam tungel-witegum (SvX) (AHTh, I, 82, 15)
 the treacherous Herod spoke to the star-wise men
 “the treacherous Herod spoke to the astrologers”
- b. eall ðis aredað se reccere swiðe ryhte (OvSX) (CP, 168, 3)
 all this arranges the ruler very rightly
 “the ruler arranges all this very rightly”
- c. þy ilcan geare drehton þa hergas on East englum &... (XvSX) (Parker 895)
 the same year harried the armies in East Anglia and...
 “in the same year the armies harried east Anglia and...”
- d. þonne beoð eowere eagan geopenede (XvSV) (AHTh, I, 18)
 then are your eyes opened
 “then your eyes are opened”

(Kemenade (1987: 17-19))

- (11) a. þæt ic þas boc of Ledenum gereorde to Engliscre spræce awende (CSOXXv)
 (AHTh, I, pref, 6)
 that I this book from Latin language to English tongue translate
 “that I translate this book from the Latin language to the English tongue”
- b. þæt Darius hie mid gefeohte secan wolde (CSOXXv) (Oros, 45, 31)
 that Darius them for battle visit wanted
 “that Darius wanted to seek them out in order to battle with them”

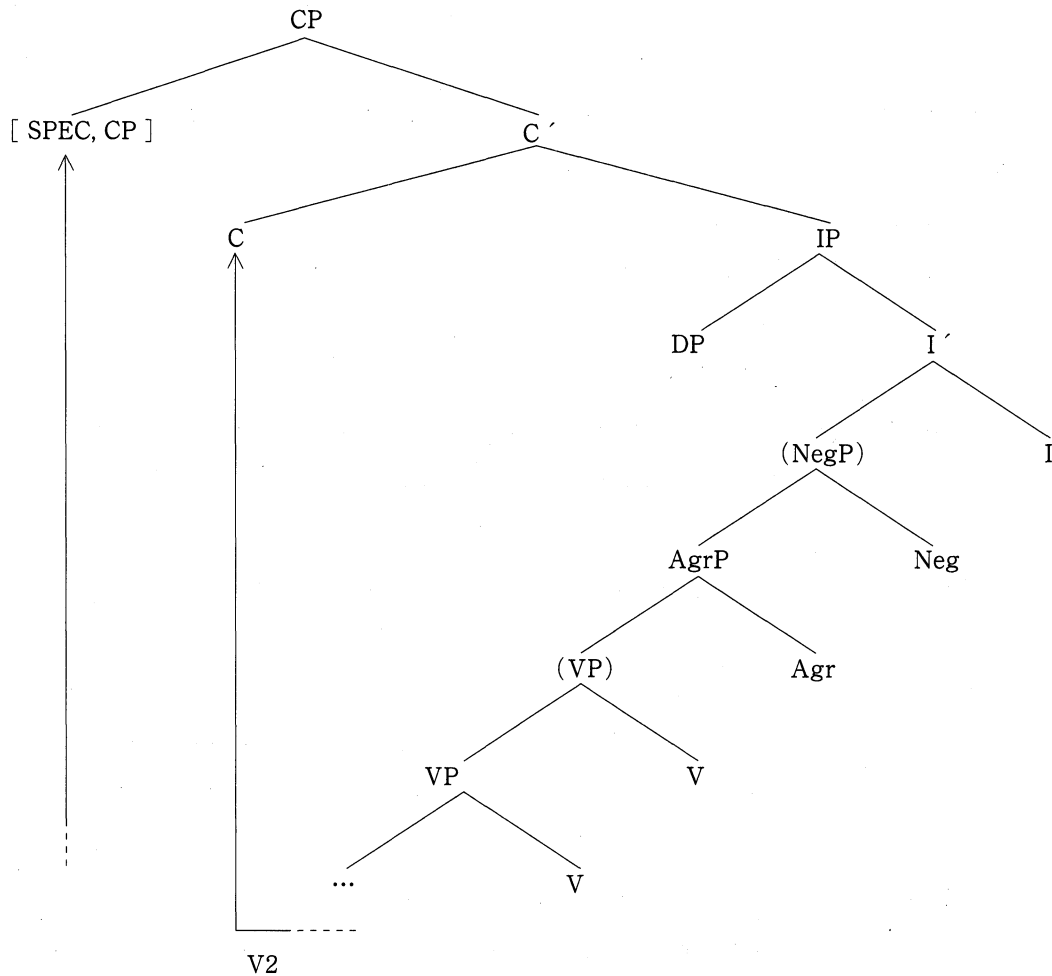
(Kemenade (1987: 16-19))

(10a) では主語、(10b) では目的語、(10c, d) では副詞類がそれぞれ文頭に現れている。(10d) は定形動詞と非定形動詞のふたつが生じている例である。すなわち、(10)の主節の例では、文頭に入る要素が何であろうと、全て定形動詞が文中の 2 番目の位置を占めている。これに対して、(11)の従属節の例ではどちらも定形動詞が節の末尾の位置に生じている。

これが最も一般的な OE の語順であり、それ以外の例外的な語順は動詞（句）上昇、接語化、その他の文体上の操作によって派生されると普通主張されている。⁵ 一般に OE の基底語順は、従属節内でごく普通に見られる SOV であり、定形動詞が 2 番目の位置に生じる主節の語順は、ゲルマン諸語に観察される V 2 現象 (verb second phenomenon) によるものであると考える研究者が多い。⁶

これを樹形図によって示すと次のようになる。

(12)



(12)で、従属節の場合は文頭のC節点が埋まっているために、時制・一致要素と動詞が結合するだけなので、文末に定形動詞が現れることになる。主節の場合には、[SPEC, CP]の位置に主語や目的語・副詞類等の要素が入り、定形動詞がC節点を占めることによって、V2現象が生じると説明される。従って、OEの基底語順はSOVであるということになるが、ここでもこのSOV仮説を採用する。

2. 2. 2. SOV から SVO へ

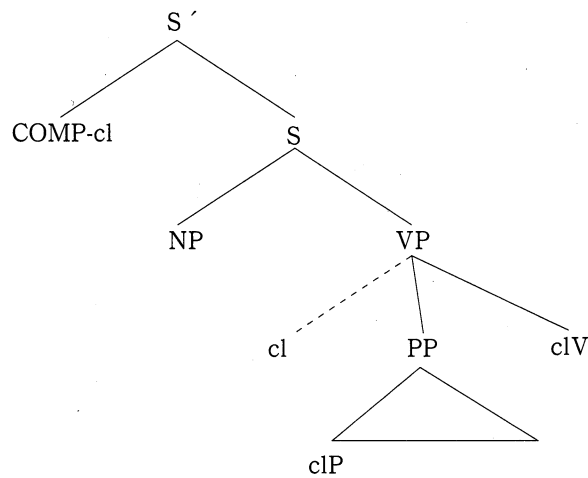
一般的には、OEのSOVという基底語順がMEではSVOに変化したと考えられている。すなわち、(12)から(3)へと構造の変化が生じたというわけである。この証拠をいちいち検証することはしないが、詳しい議論についてはKemenade (1987, 1992), Lightfoot (1991), Denison (1993)を参照されたい。後に見ていくように、『ハヴロック』の英語ではこの変化がすでに完了していたものと考えられる。

3. 考察

本節では、2節で提示した理論的枠組みを基に、1節に挙げたデータの分析を試みる。

主節・従属節いずれの場合もそうであるが、代名詞類を含まないグループと含むグループに分けたのは、代名詞類が、Kemenade (1985, 1987) でいう接語 (clitic) として機能していると考えられるからである。例えば、Kemenade (1985) では OE の不定詞補部の分析の中で、人称代名詞や場所を示す一部の代名詞類を接語と分析している。するとこれらの要素は、(13)に示すように、かなり自由に、いろいろな位置に現れていることが明白だ。⁷

(13)



(Kemenade (1985: 79))

(13)では、cl で示された場所が接語の現れる位置である。要するに、接語は通常の名詞類に比べて、軽い要素なので様々な場所に移動することが可能だというわけである。

すると、もし『ハヴロック』の英語に出てくる代名詞類が接語であるとすれば、韻律・脚韻の要請によって語順を組み替えなければならないような韻文では、頻繁に接語化が行われることが予想される。その当然の帰結として、代名詞類を含む文は、これを含まない文よりも、多様な語順を示すことになるはずである。そして実際、1節のデータが示すように、主節・従属節いずれの場合も、代名詞類を含んだグループ (1.1.2.1.節, 1.1.2.2.節, 1.2.2.1.節, 1.2.2.2.節)の方が語順の型は多くなっている。さらに、すぐ後に指摘するように、多いだけではなく基底語順にかかる操作がより複雑になっている。

また、基底語順に様々な変形操作が加わっているとすれば、基底語順の方が無標であるということになり、従ってその数も多いことが予想される。そしてこの場合もまた、予測通りに SvO あるいは SvVO という語順の生起する数が圧倒的に多くなっている。

もう少し具体的に、1.1.1.1.節から1.2.2.2.節のそれぞれのグループについて見てみよう。まず、主節の場合、1.1.1.1.節の代名詞類を含まないグループの語順のパターンは、SvO, SOv, OSv, OvS 4つであるが、これに対応する1.1.2.1.節のグループは5つである。パターンの数はひとつしか違わないけれども、前者では基底語順のパターン SvO が断然多いのに対して、後者では基底語順から逸

脱した語順パターンの方もそこそこのパーセンテージを示している。また、SOv や OSv といった語順はそれぞれ v, O をひとつ移動させるだけでよいが、OvS などはふたつ以上の操作を加えなければ生じえない。これらの結論は他のいずれのグループにも、全く同じようにあてはまる。

4. まとめ

これまで見てきたように、『ハヴロック』の英語は、語彙構成の面からは一見ゲルマン系の言語の特徴を残しているかのように思われるが、語順に関する限りその統語構造は ME に特徴的な構造であり、OE や現在オランダ語・現代ドイツ語のようなゲルマン系言語からはすでに離れていて、独自の歴史的発達を遂げているように思われる。言語変化を論じる際に、語彙の変化と統語的变化にずれがあるのは一般的に言える事実なのかどうかという点に関しては、これは今後のもっと包括的な通時的研究を待たなければならないであろう。

最後に、基底語順からずれた語順のパターン程その頻度は小さいという事実が、本調査から明らかになったが、この事実を覆す程ではなくても、例えば1.1.1.1節の OvS という語順パターンがそうであるように、この傾向に逆らうような場合がある。すなわち、この例でいうと、OvS という語順を SvO という基底語順から派生させようとするれば、少なくとも2つの操作が必要である。しかし、これは OSv という、v を移動させる操作だけで派生される語順パターンよりも多く生じている。これは、OE 期から ME 期に移っても、しばらくは存在していた V2 現象によるものであるのかもしれない。⁸

注

- 1) 『ハヴロック』全文の解釈に際しては、Skeat 編集によるテキストの注釈や『中世英国ロマンス集』中の「デンマーク人ハヴロック」も参考にしたが、著者も参加している鹿児島英語史研究会での議論が大いに役立っている。研究会のメンバーは、三輪伸春先生（鹿児島大学法文学部）、小城義也先生（熊本学園大学）、佐藤哲三先生（第一工業大学）、福元広二氏（広島大学大学院）である。ここに記して感謝の意を表したい。
- 2) 資料の分類・分析に当たって採用した方針は以下の通りである。
 - A) 主節と従属節に分けて処理する。
 - B) 主語・目的語・定形動詞を必ず含み、かつこれらが明示されている文に限る。
 - C) 主語・目的語が関係代名詞の場合、その関係節は考察の対象には含まない。
 - D) 主語・目的語のいずれかが代名詞である場合と、それ以外の場合とに分ける。なぜなら、後の議論で明らかになるように、代名詞類は接語 (clitic) として機能し、語順に影響を及ぼしている場合が多いからである。
 - E) 二重目的語構文・使役構文・受動文も省く。
 - F) AUX も含めて定形動詞は v, 非定形動詞は V と表示する。
 - G) 副詞類や前置詞句は語順の分類型から除いているが、ここでの議論に影響を及ぼさない。関連してくる場合はその時に示すこととする。
- 3) Chomsky (1986: 2) 参照。
- 4) IP 内部の構造に関する詳しい議論については、Pollock (1989) および Chomsky (1991) を参照。また、従来 NP と表示されてきた名詞句は、限定詞 (D) という機能範疇を主要部とする最大投射範疇と

みなして DP と表記する。さらに、IP の指定辞位置に生起する主語 DP は VP 内部に生成されるとする考え方もあるが、ここでの問題に関しては大きな影響はないので、初めから IP の指定辞位置に記すこととする。VP 内部（具体的には VP の指定辞位置 [SPEC, VP]）に主語が生成されるとするのは、[SPEC, IP] が θ 位置になる場合とならない場合とがあり、ここが主語の生成される位置としてふさわしくないと考えられるからである（Chomsky and Lasnik (1993: 531) 参照）。VP 内主語仮説（VP-internal hypothesis）については、Speas (1990), Kitagawa (1986), Kuroda (1988), Sportiche (1988) 参照。

ついでながら、Chomsky (1992) 以降展開されている最小主義プログラム（minimalist program）はとらない。その理由は、この理論はまだ発展中であることと、語順の問題を扱うには、ここで採用した枠組みで十分だからである。

- 5) OE の基底語順から様々な語順を生み出す操作の研究については、Allen (1980), Koopman (1985), Haegeman (1988), Haegeman and Riemsdijk (1986), Kemenade (1987), Roberts (1993), Kato (1989), 加藤 (1989), Ohkado (to appear), Reuland (1980), Kroch and Santorini (1991) 等を参照。
- 6) OE の基底語順を SOV とし、従属節の場合は V2 現象によって説明する考え方が優性であったが、語順の研究の進展と共に、OE には SOV, SVO というふたつの基底語順があったとする主張が最近出てきている（double base hypothesis）。この主張にはここでは立ち入らないが、より詳しい議論については、Pintzuk (1991, 1993), 加藤 (1989), Kato (1989), Ohkado (1988, to appear) 等を参照。
また、V2 現象に関しては、Kemenade (1987), Haider and Prinzhorn (1989), Lightfoot (1991), Pintzuk (1991, 1993), Roberts (1993), Weerman (1989) 等を参照。
- 7) Kemenade (1985: 79-81) 参照。
- 8) ME 期に入っても、V2 現象が暫くは残っていたという点に関しては、Kemenade (1992) 参照。

資 料

- Skeat, W. W. (1868) *The Lay of Havelok the Dane*, EETS, ES. 4, Oxford.
 Skeat, W. W. (1915) *The Lay of Havelok the Dane*, 2nd ed. rev. by K. Sisam, Oxford: Clarendon.
 Smithers, G. V. (ed.) (1987) *Havelok*. Oxford: Clarendon.

参 考 文 献

- Abraham, W., W. Kosmeijer, and E. Reuland (eds.) (1991) *Issues in Germanic Syntax*. Berlin: Mouton de Gruyter.
 Allen, C. (1980) *Topics in Diachronic Syntax*. New York: Garland.
 Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
 Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in Freidin, R. (ed.) (1991).
 Chomsky, N. (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*, MIT Occasional Papers in Linguistics, No. 1.
 Chomsky, N. and H. Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," in Jacobs, J. et al. (eds.) (1993).
 Denison, D. (1993) *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. London: Longman.
 Eaton, R., O. Fischer, W. Koopman, and F. van der Leek (eds.) (1985) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
 Evers, A. (1975) *The Transformational Cycle in Dutch and German*. Ph. D. dissertation, University of Utrecht. [Distributed by the Indiana University Linguistics Club.]
 Fischer, O. (1992) "Syntax," in Blake, N. (ed.) *The Cambridge History of the English Language* Vol. 2.

- (ch. 4) Cambridge: Cambridge University Press.
- Freidin, R. (ed.) (1991) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- 福元広二 (1992) 「Havelok の ON 系借用語」 日本英文学会第45回九州支部大会におけるシンポジウム『『ハヴェロック』(Havelok the Dane) の文法と語彙』での口頭発表, 鹿児島純心女子短期大学.
- Haegeman, L. (1988) "Verb Projection Raising and the Multidimensional Analysis: Some Empirical Problems," *Linguistic Inquiry* 19, pp. 671-83.
- Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government & Binding Theory*. Oxford: Blackwell.
- Haegeman, L. and H. van Riemsdijk (1986) "Verb Projection Raising, Scope and the Typology of Rules Affecting Verbs," *Linguistic Inquiry* 17, pp. 417-66.
- Haider, H. and M. Prinzhorn (eds.) (1989) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris.
- Jacobs, J., A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann (eds.) (1993) *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*. Berlin: Walter de Gruyter.
- 加藤敏三 (1989) 「SOV/SVO 言語としての古英語—Catholic Homilies に見られる節中の 'nu' をめぐって」『IVY』22, pp. 161-75.
- Kato, K. (1989) "Old English as an SOV/SVO Language: *Be* and Passive Verbs," *Linguistics and Philology* 9, pp. 25-36.
- Kemenade, A. van (1985) "Old English Infinitival Complements and West-Germanic V-Raising," in Eaton, R. et al. (eds.) (1985).
- Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht: Foris.
- Kemenade, A. van (1992) "Structural Factors in the History of English Modals," in Rissanen, M. et al. (eds.) (1992).
- Kitagawa, Y. (1986) *Subjects in Japanese and English*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts.
- Koopman, W. F. (1985) "Verb and Particle Combinations in Old and Middle English," in Eaton, R. et al. (eds.) (1985).
- Koopman, W. F. (1992) "The Distribution of Verb Forms in Old English Subordinate Clauses," in Rissanen, M. et al. (eds.) (1992).
- Kroch, A. S. and B. Santorini (1991) "The Derived Constituent Structure of the West Germanic Verb-Raising Construction," in Freidin, R. (ed.) (1991).
- Kuroda, S. -Y. (1988) "Whether We Agree or Not," *Papers on the Second International Workshop on Japanese Syntax*, CSLI, Stanford University.
- Lightfoot, D. (1991) *How to Set Parameters: Arguments from Language Change*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Ohkado, M. (1988) *On the Historical Changes of Parameter Value in English Syntax*. M. A. Thesis, Nagoya University.
- 大門正幸 (1989) 「英語史における格語尾消失と語順の関係」『中部英文学』9, pp. 85-106.
- Ohkado, M. (to appear) "On the Underlying Structure of Old English with Special Reference to Verb (Projection) Raising," in *A Festschrift for Dong-Whee Yang: Explorations in Generative Grammar*.
- Pintzuk, S. (1991) *Phrase Structures in Competetion: Variation and Change in Old English Word Order*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Pintzuk, S. (1993) "Verb Seconding in Old English: Verb Movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, pp. 5-35.
- Pollock, J. Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, pp. 365-424.

- Reuland, E. (1980) "V-raising in Dutch: Anomalies Explained," *CLS* 16, pp. 269-81.
- Rissanen, M., O. Ihalainen, T. Nevalainen, and I. Taavitsainen (eds.) (1992) *History of Englishes: New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Roberts, I. G. (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*. Dordrecht: Kluwer.
- Speas, M. (1990) *Phrase Structure in Natural Language*. Dordrecht: Kluwer.
- Sportiche, D. (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, pp. 425-49.
- Toman, J. (ed.) (1984) *Studies in German Grammar*. Dordrecht: Foris.
- Travis, L. D. (1985) "The Role of INFL in Word Order Change," in Eaton, R. et al. (eds.) (1985).
- Weerman, F. (1989) *The V2 Conspiracy: A Synchronic and a Diachronic Analysis of Verbal Positions in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris.